

紙芝居の魅力

青木眞子，天野里菜，植田靖菜，加藤彩華，薫田優希，小森菜美，佐藤優子，
関絵里子，高井息吹，武井梨夏，夏井 彩，野田瑠音，枇杷あずさ，神原雅之

はじめに

子どもの頃に紙芝居に目を輝かせて聞き入ったという経験を持つ者は多い。ここでは紙芝居の魅力を再考するために、様々な角度からアプローチを試みた。本ゼミに所属する者が分担して、紙芝居の歴史、種類、方法などについて文献的調査を行った。それを基礎に、紙芝居は子どもたちにとってどのような存在なのか、現代における紙芝居の魅力について一考察を加える。

1. 紙芝居の歴史

1-1 戦前・戦中の紙芝居

日本の歴史の中で、絵を見せながら語る紙芝居的な存在はかなり以前に遡る。もっとも古い記述は、12世紀後半の『源氏物語絵巻』¹であると記録されている。現在のような絵を引き抜いて演じるという紙芝居の形は1930年頃に始まったといわれている。紙芝居の始まりは、飴売り商人が客寄せのために紙芝居を見せていた。紙芝居は、もとは飴売り商人の大道芸だったのである。その当時、紙芝居屋のことは「飴売りの紙芝居」と呼ばれていた。何枚かの絵を次々に見せて語るという紙芝居の芸は、単純とも言えるが、他の国にはない日本独自のものであった。

1931年には冒険活動『黄金バット』（鈴木一郎作・永松武雄絵）が大当たりし、紙芝居ブームが起きる。続いて、冒険活動『少年タイガー』（山川惣治作画）と怪奇もの『ハカバキタロー』（伊藤正美作・辰巳恵洋絵）も大ヒットした。これらの作品はヒーローの活躍が描かれている。

昭和初期の不況の最中、収入が得られる商売として紙芝居屋を選んだ失業者は少なくなかったようだ。絵は手書きで、一枚限りの原画をたらい回しにした。もともと紙芝居には裏書き(脚本)がない。前日にその絵を使った紙芝居屋が次の紙芝居屋にあらすじを伝えて話をつなげるというやり方だった。そのため、紙芝居屋はあらすじに自分なりのセリフや即興の文句(アドリブ)を加え、お客の子どもを喜ばせる工夫をしていた。

1933年の東京市の紙芝居屋は2500人くらいとされ、一人の紙芝居屋が一日に十か所、一か所で30人の子どもを集めるとすれば、東京市内だけで毎日75万人の子どもが紙芝居を見ていたことになる。

紙芝居屋の絵に裏書き(脚本)がつけられたのは1938年からである。それは、警視庁が紙芝居の内容の検閲をするためであった。紙芝居が生まれたのは満州事変の時期で、その頃からすでに「軍国美談」の紙芝居を作って国際便乗を図る者もいた。

1944年、都市部を中心に国民学校初等科3年生から6年生の学童集団疎開が実施されたが、疎開先

¹ 『源氏物語絵巻』は11世紀に紫式部によって書かれた源氏物語を素材にしたものである。

の効果的な教育手段として紙芝居が重宝された。この年に刊行された『紙芝居』第7巻第10号には疎開特集が生まれ、次のように記されている。

「紙芝居の特性は、しばしば言われているように、いつ・どこでも・誰にでも実演できること。少集団に対して効果を発揮すること。しかも極めて簡単な形式でありながら、極めて偉大なる効果—特に児童に対して絶対的な効果を有すること、等であった。少し功利的な見方ではあるが、形式の簡単なこと、したがって経費もいらず、だれにも取扱い得ること、等は疎開現地の宿舍の現状に適應しているのではないか、いつ・どこでも出来ること、これも疎開地に於ける、あらゆる機会を捕えて教育せんとする方式に適しているといえよう」(近藤修博「集団疎開における紙芝居の意義」より)

しかし、東京市では疎開の影響で子どもは少なくなり、紙芝居は成り立たなくなった。

【引用及び参考文献】

上地ちづ子(1997)『紙芝居の歴史』久山社, p.12

鈴木常勝(2007)『紙芝居がやってきた!』河出書房新社, pp.104-107

(枇杷あずさ)

1-2 戦後の紙芝居

1) 紙芝居と検閲

戦前から様々な検閲を受けてきた紙芝居は、戦後もGHQ(連合軍総司令部)による検閲を受けた。プレス、放送、検閲を受けない紙芝居の使用は禁止され、検閲対象となる文章や文脈をかえて再利用することも度々あった。昭和24年(1949)に、街頭紙芝居に対するGHQの検閲制度が廃止になり、低俗な内容が増えたとされ、新聞などには紙芝居の内容に対しての筋の荒唐無稽さを非難する記事が掲載された。群馬では思想の検閲ではなく、モラルの向上を目的として、講習会や試験による免許制度を実施したが、それでも悪質な紙芝居が多かった。そのため、昭和26年(1951)1月に東京で新たに「紙芝居論理規定管理委員会」が発足し、「論理規定二十二ヶ条」を定め、検閲をした。(齋木, 2012, pp.51-53)

2) 紙芝居とテレビの普及

戦前の紙芝居は戦災でほとんど焼けてしまった。戦争に行き帰ってきた人や、家や職を失った人などが仕事を求めて紙芝居屋に集まり、昭和23年(1951)には東京で3000人、昭和25年(1953)には全国で5万人に至った。これが紙芝居の第二の全盛期である。戦後の紙芝居は、昭和21年(1946)1月に加太こうじの描くともだちの会「黄金バット(世界制覇を企むナチス残党に立ち向かう平和戦士に変わっていた)」や新日本画劇社の「少年イーグル」で始まった。しかし、昭和28年(1953)にテレビ放送が開始され、テレビが普及していったと共に、紙芝居は衰退していった。昭和29年(1954)には、大阪を中心に1545人の街頭紙芝居師がいたが、少なくなっていった。(齋木, 2012, p.54)

3) 紙芝居と教育

街頭紙芝居の人气が廃れても、アニメーションのキャラクターが次々と紙芝居になり、有名な昔話や文芸作品が紙芝居として登場するなど、娯楽作品や教育目的としても活用されるようになる。教育現場では、国語、伝記、偉人伝、自然観察、道徳教育、理解、英会話に関する紙芝居が学習教材として利用され、保育教材として、童話やしつけを題材としたものが教育熱心な父母や保育士の支持を受けた。また、戦後の民話運動の影響を受け、新しい民話紙芝居が生まれた。民話は幅広い年齢層に人気なため、幼児から大人までが対象となった。昭和30年(1958)から『かきじぞう』などの多くの民

話紙芝居が出版された。(齋木, 2012, pp.62-64)

4) 紙芝居の今

童心社は、紙芝居を日本の誇る文化として、積極的に世界博覧会で紹介するなど、その普及に力を注いだ。紙芝居を通じて文化交流も行われるようになり、平成3年(1991)にベトナムで KAMISHIBAI として紹介されると、ベトナムにも作家が生まれた。他にもラオスやフランスでも紙芝居は人気になっている。平成14年(2002)には、童心社を中心として世界紙芝居文化の会(The International Kamishibai Association)も発足している。

【参考文献】

齋木祥行 (2012) 『紙芝居の世界』メディアバル

鈴木常勝 (2007) 『紙芝居屋がやってきた!』河出書房新社, pp.104-113

(薫田優希)

2. 紙芝居の種類

2-1 紙芝居のいろいろ

1) 紙芝居の分類

紙芝居を内容的に分けると、物語そのものが完結している「物語完結型」と、観客が言葉や動作で参加する「観客参加型」の二種類がある。紙芝居の大手出版社であり、創業55年以来紙芝居を創り続けている童心社が、現在発売している紙芝居は全部で約350ほどある。童心社のホームページ上では、それらの紙芝居がいくつかのジャンルに分類され、検索できるようになっている。その分類と物語の例を表1に掲げた。

表1 紙芝居の分類(童心社)

年少版紙芝居	あかちゃんかみしばい ばちばちにっこり, よちよちはーい
民話紙芝居	ももたろう, てぶくろ, かっぱのすもう
名作紙芝居・日本	新美南吉童話名作集, 宮沢賢治童話名作集
名作紙芝居・世界	あかずきんちゃん, 三びきのこぶた, しらゆきひめ
自然・知識紙芝居	ゴーゴーのりものかみしばい, たのしいかずのせかい
行事・円生活・安全教育・食育紙芝居	入学準備かみしばい がっこうってたのしいな, じしんだ! かじだ!
こども参加型紙芝居	だるまさんがころんだ, おにはーそと!
創作紙芝居	松谷みよ子のかわいいおはなし, いわさきちひろ画紙芝居選
英語紙芝居	ハロー! はじめての英 KAMISHIBAI BABY CHICK, GROW GROW GROW BIGGER
フランス語紙芝居	フランス語版したきりすずめ, こねこのしろちゃん

また、ジャンルの他にも、0・1歳～, 2歳～, 小学校低学年～, 中学生～などといったように対象年齢から探すことができたり、“こんなときこんな紙芝居”と題し、「思いつき笑いたい」, 「平和について考える」, 「災害, 事故から自分を守る方法」など、その時々で読みたい目的から検索することもできる。

2) 紙芝居と絵本

『広辞苑（第六版）』によると、紙芝居とは「物語の場面を連続的に描いた絵を、順次1枚ずつ出して観衆に向けて、劇的に説明するもの。」とあるように、紙芝居は、演じ手と観客が揃ってこそ、初めて成り立つものである。前述の表からもわかるように、紙芝居の原作となっている物語は、絵本としても出版されているものが多い。が、どちらも同じように読み聞かせるのでは、それぞれの特徴を生かすことは出来ないと思われる。

紙芝居は、絵本にはないダイナミックな動きが出来るため、紙を抜いたり、差し込んだりする間の取り方ひとつで、子どもたちの物語への惹きつけは大きく変わるだろう。また、語り手が一人ではなく、複数人で出来ることも特徴の一つだろう。絵本が“読む”ものであるとするならば、紙芝居は“演じる”ものであると言えるだろう。紙芝居を通して、絵本とは違った楽しさや面白さでその物語の魅力を伝えることが出来ればいいなと思う。

【参考文献及びインターネット資料】

子どもの文化研究所（2011）『紙芝居—子ども・文化・保育 心を育てる理論と実演・実作の指導』一声社

童心社 <<http://www.doshinsha.co.jp/index.php>>（2014/5/21 アクセス）

藤田由美子（2014）「保育における紙芝居活用に関する一考察」

<<http://harp.lib.hiroshima-u.ac.jp/h-bunkyo/metadata/12136>>（2014/5/21 アクセス）

（青木眞子）

2-2 紙芝居の種類

1) 街頭紙芝居と印刷紙芝居

紙芝居には大きく分けて、「街頭紙芝居」と「印刷紙芝居」の二種類がある。

街頭紙芝居は、文字通り「街頭」つまり街中で演じられる紙芝居のことである。自転車の荷台に舞台をのせた紙芝居屋さんが路地や公園にやってきて、子どもを集め、飴や煎餅などのお菓子を売り、そのお菓子を買った子どもだけが紙芝居を見ることが出来る。つまり、お菓子が見料というわけである。

現在、学校や図書館、幼稚園などで演じられる紙芝居は、絵も言葉も印刷されており、これは「印刷紙芝居」とか「教育紙芝居」と呼ばれるものである。その元にあったのは「街頭紙芝居」であった。

街頭紙芝居は、冒険もの（『黄金バット』など）、現代もの（『山のよび声』など）、時代劇（『鞍馬天狗』など）、怪奇もの（『墓場鬼太郎』など）、漫画もの（『キンちゃんコロちゃん』など）、クイズなど様々なジャンルがあった。

また、印刷紙芝居は多様な分野で広く利用された。戦時中は、ニュース映画の代わりに紙芝居でニュースを伝えたりして、メディアの役割も担った。戦後は、GHQ（連合軍総司令部）によって日本における「紙芝居」の重要性が指摘され、その存在がアメリカでも知られるようになった。そのような中、英語の紙芝居も発売され、さらに社会教育や学校教育においても積極的にも利用されるようになった。

2) さまざまな紙芝居

紙芝居には様々なタイプのものがある。次にいくつか挙げてみよう。

電気紙芝居：昔はテレビが電気紙芝居と呼ばれていた。

手づくり紙芝居：TVの台頭によって街頭紙芝居が廃れたのち、母親が子どもや友だちのために作って見せる「手づくり紙芝居」が各地で作成されるようになった。紙芝居の双方向性が見直され、「紙芝居

まつり」や「手づくり紙芝居コンクール」などのイベントを中心に、全国各地の個人、団体が活動しており、紙芝居文化を継承している。

ロール紙芝居：昔の忍者物などに出てくる巻物のような紙芝居。語り手が話を進めながら右手で送って左手で巻き取っていく。

デジタル紙芝居(電子紙芝居)：デジタル紙芝居とは、電子紙芝居とも言われていて、媒体が紙の絵ではなく、パソコンなどで見る事が出来るデジタル化された絵による紙芝居である。プロジェクターを使えば、会場のスクリーンに投影して、大勢で見ることができる。

【参考文献】

小川慎二郎 (2012) 『芝居の世界』 昭和館

【インターネット】

畑中圭一 『街頭紙芝居と子どもたち』 東京都立図書館

<http://www.library.metro.tokyo.jp/tabid/2359/Default.aspx> (2014年5月*日閲覧)

(高井息吹)

3. 紙芝居の方法

3-1 紙芝居の演じ方

1) 紙芝居を「演じる」ということ

紙芝居とは読んで字の如く芝居であるので、ただ文章を読み上げるだけではなく、様々な工夫を凝らして物語を魅力的に演じることが重要である(今井, 1934)。ここでは、紙芝居の内容をより楽しく伝えるために必要な <演じ方のポイント> をみてみよう。

2) 紙芝居を選ぶ

まず紙芝居を演じる練習をする前に、演じる紙芝居を選ぶ必要がある。紙芝居の選択は特に重要である。絵と絵の間で、話が飛躍するものは子どもにとって理解し難い。つまり(絵と絵の間で)絵には描かれていない場面の説明をしながら演じていく必要があるため、読み手自身もやり難い。その一方で、有名な童話のように枚数の多いものは、場面の説明をいちいち話さなくても理解し易く、読み手も演じやすい。(今井, 1934)

紙芝居を選択するときには、紙芝居を見聞きする子どもたちの発達段階にも配慮する必要がある。物語の長さ、内容の分かり易さ、絵の大きさなどに考慮して紙芝居を選ぶことが大切である。

3) 効果的な演じ方

子どもたちの前で紙芝居を演じる前に、必ず <下読み> をする必要がある。読み手自身がよく理解していない物語をいきなり演じるのでは、その物語のおもしろさをうまく表現できない。次のような演じ方のポイントに留意しながら、紙芝居を下読みしてみよう。以下、下読みの際に留意する点について挙げてみよう。

表2 演じ方のポイント(東京家政大)

①どんなタイプの話なのか大まかな雰囲気を理解する

- ・物語か、観客参加型か
- ・民話か、現代の話か

②絵や脚本を見て登場人物の性格を想像する

- ・優しいおじいさん，意地悪なおじいさん
- ・元気な子犬，年老いた老犬

③絵をヒントにして文の読み方を工夫する

- ・大口をあけて笑っている絵：大きな声で愉快そうに笑う
- ・にっこりとすまし笑いをしている絵：あまり口をあけず穏やかに笑う
- ・登場人物の動き方にも注目する：走っている，転んでいる，寝転んでいる，など

4) 絵の抜き方

紙芝居を演じる上で，絵を「抜く」という行為はとても重要である。速さやタイミングを工夫することで，物語をより効果的に演出できる。次のそのポイントを挙げた。

表3 絵の抜き方（東京家政大）

素早く抜く	瞬時にシュッと抜くことで，緊迫感を出す。次の場面のインパクトを強める。
抜いて途中で止める	一枚の絵で二場面あるかのような効果を作る。次の展開への期待感を煽る。
画面を動かす	絵を親指と人差し指でつまみ，上下にゆらすことで，登場人物に動きがでる。背景によっては動かすと不自然になるものもあるので注意する。

5) 紙芝居の舞台

紙芝居は，文字通り「芝居」である。芝居には舞台が必要である。舞台のふち（縁）があることで絵が引き締まって見えるほか，（表3のように）様々な抜き方を行うこともできる（今井，1934）。ピンクや水色などカラフルな舞台や，動物や花の彫り絵がしてある舞台など，舞台には豊富な種類がある。ダンボールで手造りすることもできる。

【参考文献】

今井よね（1934）『紙芝居の実際』基督教出版社，pp.196-207

【インターネット】

東京家政大学『紙芝居の演じ方』http://www.tokyo-kasei.ac.jp/~uchida/HOI/HOI01/A_38/link.html
（2014/4/21 閲覧）

（天野里菜）

3—2 紙芝居の作り方

ここでは，紙芝居の作り方についてみてみよう。

1) 絵を描くときの留意点

紙芝居のもととなる型紙がある場合は型紙から直接画用紙にコピーする方法がある。この場合はコピーしたインクが伸びてしまわないようにしっかり乾かしておく。一方，オリジナルの絵を描く場合はメインのキャラクターやイラストを常に意識し，遠くから見てもしっかり目立つ構図にする。つまり，縁取りの色（黒の場合が多い）をしっかりを太く描くと色も塗りやすく仕上がりもきれいになり，遠くからでも見やすい紙芝居になる。

色を塗るときにもいくつかの考慮が必要である。近い色が近くにあると遠くから見たときにぼやけた印象となってしまう。ポイントとなるキャラクター，イラストは遠くからみてもはっきりと目立つように工夫する。色を塗っていく順番は，薄い色から濃い色（明るい色から暗い色）の順番で塗っていくが，一度に濃く塗らずに他とのバランスを見ながら少しずつ濃くしていくとよい。また，白い紙か

ら作る場合は、背景を塗るときに紙の白を活かしながら仕上げていくとよい。立体感を出したいときは光の方向に留意し、影の方向に濃い色を塗っていくとよい。

全体的に色塗りは一枚ずつ仕上げていくのではなく、同じキャラクターや同じ色を使うものをまとめて仕上げていくとよい。色塗りの途中であっても時々遠くから絵を見て色のバランスやポイントの絵が目立つかどうか確かめながら作業すると、斑が出来なくてよい。

2) 色塗りのための画材

紙芝居を作るときの画材には、いろいろな種類がある。それぞれに長所短所があるので上手に使い分けていく必要がある。以下、主な画材を取り上げ、その取り扱いのポイントを整理してみた。

表4 主な画材とその取り扱い

絵の具	絵の具はオリジナルの色が作れ、きれいに塗ることができる。しかし作業に手間がかかり時間がかかってしまうため、乾くまで他の場面を塗ったりする流れ作業にするとよい。薄い色やパステルカラーを作りたいときはしっかりと白を混ぜるときれいに発色する。絵の具の斑を生かしたいときは水で薄めるが、薄めすぎると画用紙にしわがよってしまうので注意が必要だ。また、厚く塗りすぎると絵の具がヒビ割れたり、めくるときにはがれ落ちたりしてしまうため水加減には気をつけて薄く平らに塗っていく。
色鉛筆	色鉛筆は手軽で作業時間も短く済み、濃淡もつけやすいが広い部分を塗るときに弱くて単調な色になってしまいがちだ。色を重ねたり混色したりして工夫するとよい。また、立体感を出したいときは中心となる色を塗ったあとさらに濃い色を影の方向に重ねていくとよい。
マーカー	マーカーははっきりとした色で塗れるので遠くから見たときに目立つが、広い部分を塗るには色が濃くなりすぎてしまうため適しておらず、色も限られているので目立たせたいポイントに使うようにして他の画材と併用するとよい。

他にも様々な画材がある。その時々に応じて色々な画材の利用の仕方がある。例えば、クレヨンも紙芝居を重ねたときに色がうつってしまうため不向きだが、クーピーであれば色移りの心配も少なくクレヨンのような質感を出すことができる。また、一つの画材にこだわらず、絵の具で薄い色を塗って乾いた上から色鉛筆で影を描いて立体感をつけたりするのもおもしろい。それぞれの長所を生かし、広い部分には絵の具、細かい部分は色鉛筆やマーカーなど、自由な発想で画材をつかっていくとよい。

3) 文脈のポイントを目立たせる

これまで、紙芝居の作り方についてみてきた。紙芝居の絵と、普通の絵の最も大きな違いは常に遠くから見ることを意識することであることがわかった。一般的な絵画のように細かい部分(繊細さ)にこだわるのではなく、文脈のポイントを目立たせることが重要である。

【参考文献】十亀敏枝(2000)『たのしい紙芝居アイデア』民衆社、pp.6-114

(小森菜美)

3-3 紙芝居と保育

1) 紙芝居の特徴

紙芝居は、保育者が子どもに向かって一定の距離をおいて演じるもので、ストーリーの持つ目的を集中的に理解されるように作られている。言葉は読むものでなく、演じるように書かれ、絵は遠目のきくように大胆に省略されている。また、紙芝居の絵を抜くということは、展開発展の劇的効果をあげる手法で、演じる者と見る者との間には自然に心と心の触れ合いが生じる。

2) 保育への取り入れ方

保育者は、どのような意図で紙芝居を取り入れるのだろうか。一つは、子ども達に何かしつけない、約束事をわからせたい時である。言葉だけで理解しにくいことも、(紙芝居によって)より具体的に示されることで子どもは理解し易い。また、紙芝居は繰り返し与えることが容易なので、生活習慣の獲得など、自然に身につけていくときに役に立つだろう。

紙芝居の中に含まれる会話(言葉)と一緒に口に出して言うことによって、発語を促すこともできるだろう。

3) うた紙芝居

新しい紙芝居の一つとして「うた紙芝居」がある。従来、新しい歌を子どもたちに教える時は、先生が歌って聞かせたり、途中で区切りながら口伝えで教える。しかし、日が経つと記憶があいまいになり、歌詞が混ざったり、盛り上がるのところしか覚えていなかったりする。そこで「もっと楽しく覚えて歌ってほしい」との願いから、「うた紙芝居」が生まれた。「うた紙芝居」の流れは、概ね次の通りである。

- ① 紙芝居のようにお話をしたり、歌ったりして、歌の内容を知らせる。保育室の壁に貼る。壁に貼ることにより歌の内容について友達と話すことができる。
- ② 歌詞を書いた紙も一緒に貼る。文字がまだ読めない子どもにとっては文字に興味を持つきっかけになる。
- ③ 「うた紙芝居」を壁からはずして、子どもたちと一緒に歌ってみる。

このような流れを通して、子どもたちは楽しく覚えることができる。また、壁から外した「うた紙芝居」を自由に使って遊んだり、絵画をコピーして子どもたちが色を塗って自分の「うた紙芝居」を作ることできる。

【参考文献】十亀敏枝(2000)『たのしいうた紙芝居アイデア』民衆社, pp. 34-41

(野田瑠音)

4 紙芝居と子ども

4-1 紙芝居の昔

紙芝居は、現在も幼児教育の場に馴染みのものである。昔の子どもたちにも日常文化として親しまれていた。街頭紙芝居の全盛期は1932年から1940年頃といわれている(日本子どもの本研究会, 1983, p. 65)。ここでは、その当時の子どもたちにとって紙芝居がどのような存在であったかみてみたい。

1) どれだけ馴染んでいたか

1934年は街頭紙芝居の最盛期であった。この当時に実施した紙芝居の調査報告がある(今井, 1934, p. 11)。これは横浜のある小学校で、在校生660名に対して調査したものである。その報告によると、660名の内、紙芝居を見ない子どもは僅か36名であった。その30名は家庭で禁止しているので見られないという理由であった。624名は紙芝居を見ていた。その内、毎日1度は見るという子どもが300名もいた。更に、毎日5~6回紙芝居を見て回る子どもも少なくなかった、と報じている。

これは横浜での調査だが、東京でも大きな違いはなかったようだ。山手の上流家庭は別としても、子どもを街頭で遊ばせる家庭の95%の子どもは紙芝居に親しんでいたようである。

また、次のような記述もあった(今井, 1934, pp. 2-3)。子どもたちはどの合図がどの紙芝居であるか、また何時ごろ、何が、どこに来るかをよく知っている。下町の中流以下の子どもは、1日のお小

遣いとして3銭から4銭貰う子が多かったという。そのうちの1銭は最も好きな紙芝居に使っていたようだ。街頭紙芝居のおじさんから拍子木と鉄板を借りて、ごっこ遊びをしている子どもがいた。

これらの記述から、当時の子どもたちにとって紙芝居は馴染みのあるものであったことが窺われる。

2) なぜ子どもに普及したか

多くの子どもたちに愛好された理由は何だったのだろうか。その一つは時代的背景を看過できない。子どもはお話を聴きたがり、家族に頼むものの家族は忙しくて（さほど忙しくなくても）子どもの要求には一向に無頓着で、聞き上げて貰えない場合が多かったそうだ。紙芝居は、お話を聞きたいという子どもの欲求に適っており、毎日30分ほど面白いお話をしてくれる紙芝居のおじさんを子どもたちが歓迎しないはずがない。街頭に杵を立て、何も言わずに立っていても、10分もいれば常に3、40人は子どもが集まったそうだ(今井, 1934, pp.5-6)。

当時は子ども向けの劇もあったそうだが、それはごく僅かしかなく、裕福な階級の子どもだけが、あるいは特別な人々だけが楽しんでいたようだ。劇の鑑賞は、一般民衆の子どもに及んでいたとはいえなかった(今井, 1934, p.8)。

紙芝居が普及したもう一つの理由は、その内容である。教育家や高級な子ども絵雑誌には、いかに子どもを喜ばせるかということは考えられていたが、こうさせたい、こう導きたい、こういう印象を与えたいといったように、子どもの欲求を見つめる(子どもの進むべき方向を示したい)という理想の方が勝っていた。それに対して紙芝居は、そういった理想は希薄で、ただひたすら子どもが何を要求しているのかを探して作られている。子どもを喜ばせればよいという色彩が強かった(今井, 1934, pp.9-11)。これが子どもたちを紙芝居に夢中にさせた大きな理由と考えられる。

加えて(これは私の体験から想像したものだが)、街頭紙芝居ではお菓子が配られたという。お菓子を食べながら自分の欲する面白いお話を聞くことができる。これは子どもたちにとって大きな魅力になったであろうと思われる。

【参考文献】

今井よね著(1934)『紙芝居の実際』基督教出版

日本子どもの本研究会著(1983)『子どもの本と読書の事典』岩崎書店

(加藤彩華)

4-2 現代の紙芝居と子どもの関係

紙芝居は子どもの心を育てる大切な児童文化財の一つである。現在でも、紙芝居は子どもたちの成長に欠かせないものとして、全国の幼稚園や保育園、小学校で見直されている。

ここでは、紙芝居と子どもの関係について着目してみよう。

周知の通り、紙芝居は一枚一枚の画面を抜きながらお話を演じていく。子どもたちの発達段階に合わせて演じ分けることができる。読み手の生き生きとした表現が、子どもたちの自由な反応を引き出すきっかけとなる。つまり、読み手が一方的に話を進めるのではなく、子どもたちの反応を見つつ、コミュニケーションをしっかりと取りながら話を進めて行くことが望ましい。また、紙芝居のゆっくりとしたテンポは、子どもの心や体のリズムに合っている。これは子どもの理解力や想像力を引き出すきっかけになり、感性を育てることに繋がるのである。このように(紙芝居は)子どもの「共感」を育むことが出来るコミュニケーションツールになる。(童心社, 2014)

集団の場において紙芝居を扱う場合、先生や友達と共にハラハラドキドキしたり、皆の存在を間近

に感じながら楽しむことで、心と心が響き合い、その場が一つになることが出来る。同じ場でお互いに向き合うことであたたかい人間関係を築き上げ、共に分かち合う心を育てることが出来るのである。(童心社, 2014)

『おおきく おおきく おおきくなあれ』(まつい のりこ作) という紙芝居がある。この作品の中には、読み手が子どもたちに向けて「おおきく！おおきく！おおきくなあれ！と言ってみよう」と呼びかける場面がある。子どもたちがその呼びかけに応じると、次の場面に移り変わり、話が進んで行くという仕組みになっている。このとき子どもたちは、周りのお友達が発する声に耳を傾けながら、お互いに声を出すタイミングを合わせたり、声を張り上げてみたりする。このようにしてコミュニケーションを交わすことにより、子どもたちの間に共感の輪が広がっていくのである。(酒井, 2014)

【インターネット】

童心社『紙芝居講習会のご案内』

<http://www.doshinsha.co.jp/kamishibai/school/> (2014/4/28 閲覧)

酒井京子『暮らしのお役立ち情報 今月の「生きるヒント」バックナンバー』

<http://www.zenrosai.coop/kurashi/osusume/backnumber/kosodate/05index.php> (2014/5/12 閲覧)

(夏井 彩)

5. 紙芝居の魅力

5-1 紙芝居の魅力(1)

1) 読み手と聞き手の一体感

紙芝居の魅力の一つは、読み手と聞き手の一体感にあると考えられる。読み手は、その場の聞き手と特別な空間を作り上げ、それを共有する。その空間には、ある種の非日常性がある。そして、それは聞き手を紙芝居の物語に引き込ませる絶妙なスパイスとして聞き手にはたらきかける。

では、読み手はどのようにしてその特別な空間を作り上げているのだろうか。紙芝居における特別な空間の演出には、大きく分けて二つの要素が必要である。聞き手側の心理的な面からみた要素と、読み手側の演技方(技術的な要素)である。このふたつが揃って初めて、非日常的な空間が演出され、その場に一体感が生まれる。

2) 聞き手の心理

聞き手側の心理的な面についてみてみよう。はじめに、紙芝居の聞き手という集団が、どのような関係性の人々で構成されているかについて考えてみよう。そもそも、紙芝居の聞き手とは、その場限りの一時的な集団であることが多い。聞き手のなかには、仲の良い友人もいれば、お互いに知らない人、もう二度と会うことはないかもしれない他人同士が混ざっていることもある。そのような人々が、紙芝居を見るという目的を共有し、同じ場所で、同じお菓子を食べながら、同じ紙芝居を見る。このような、さまざまな人で構成された聞き手集団は、(紙芝居を通して)無意識のうちに一体感が生まれる。

紙芝居を見る聞き手の心理について考えてみよう。まず、聞き手には、感情が伝染しやすい。声の大きい意見に流されやすいなど、集団心理の影響が少なからずはたらく。つまり、聞き手全体で感情の共有がなされる。笑いや、はらはらどきどきする気持ちをまわりと共有するとき、聞き手集団には高揚感や安心感が与えられる。こうした感情は、聞き手側の反応をより良くし、相乗効果で読み手の演技方にも拍車がかかる。そうして、聞き手だけでなく、読み手と聞き手の間に一体感が生じ、独特

の、特別な空間がそこに出現するのである。

3) 紙芝居の非日常性

紙芝居においてもっとも魅力的な要素の一つが、その特別な空間にあると考えられる。例えば、みんなで見た紙芝居を、自分一人で見るとは、全く感じが違うだろう。なぜなら、(一人では)感情や感想を共有する相手がいない。それは(当然であるが)盛り上がり欠けるので、読み手の読み方演技方にも気合いがはいらず、結果的に紙芝居はつまらないものになってしまう。

紙芝居における最も大切な要素は、聞き手という集団を形成することである。紙芝居は、一人ではなくみんなで見る、というところに大きな魅力がある。しかも、その集団はその場限りの一時的なものである。友人あるいは見知らぬ他人と、感情を共有し、感想を言い合う。また、読み手である紙芝居やさんは、いつも同じ場所に留まっているわけではない。普段の景色に取り込まれない、いわばイレギュラーな存在なのである。そういった存在の仕方が、紙芝居にさらに特別なイベントという認識を色濃くさせるのだ。

紙芝居のもつ非日常性は、常に聞き手を魅了してきた。現代ではテレビやインターネットの一般家庭への普及により、街中ではあまり見るができなくなってしまうが、それでも幼稚園や小学校などの教育機関、保育園などでは多くの子どもたちに親しまれている。紙芝居は、私たちに、みんなで感情を共有することのおもしろさ、新鮮さに気づかせてくれる素敵な文化であると考えられる。

【参考文献】

加古里子(1999)『絵本への道:遊びの世界から科学の絵本へ』福音館書店, p.49

【インターネット】

紙芝居の世界 www.yo.rim.or.jp/~tomte/kami/ (2014/4/22 閲覧)

浅草 時代屋/紙芝居 www.jidaiya.biz/kamishibai.html (2014/4/22 閲覧)

(佐藤優子)

5-2 紙芝居の魅力(2)

紙芝居の魅力について考えてみた。紙芝居には次のような特性があるように思われる。

- ・絵本とは異なる、紙芝居ならではの独特な世界観や特別感
- ・紙とペンさえあれば簡単に物語を作ることが出来る
- ・間、セリフ、効果音、を場の空気に合わせてアレンジすることができる
- ・画面いっぱい描かれた絵の迫力
- ・絵のめくり方(抜き方)で変化を与えることができる(細かい場面展開)

これらに共通するものは、「演者」である読み手である。演者の話し方・紙のぬき方・その他の様々な(演者の様々な)アレンジによって、同じ話でもまったく違う話のように物語を進めることができる。私は、その演者の作り出す魅力について調べていくことにした。

そこで動画(youtube)で同じ作品を読んでいる何人かの演技を比較してみた。

1人目の人(http://www.youtube.com/watch?v=A2Ex_PrStTE)は、始まる前に子どもたちに身近な最近のアニメに話を例え、芝居中にも説明を加えて子どもたちが興味を持てる環境を作りわかりやすいように話を進めている。

2人目の人(<http://www.youtube.com/watch?v=9Fqx4pWv4uY>)は、芝居中に子どもたちに語りかけ、セリフを子どもたちにも投げかけ子どもを脅ろかしたり、芝居に聴き手を巻き込んで話を進めている。

3人目の人(<http://www.youtube.com/watch?v=TfUwgRGNV8I>)は、自分自身で役になりきり、絵だけではなく、身体を使って演じ、自ら芝居に張り込み、話を進めている。このような一風変わった演じ方もあるが、そういった同じ作品でも個性があることで話の流れや雰囲気がガラリとかわることがあるのが、紙芝居の『魅力』のひとつだと思う。

最後に、この人(<http://www.youtube.com/watch?v=rxeoBUOvLMI>)は、大きな絵で見やすく、話の区切りで鳴らす大きな音、が「お！？なんだろう。どうなるのだろう」という気持ちにさせる。画面をゆっくりと抜いていくので場面背景の移り変わりがわかりやすく、迫力のあるシーンでは、サッと早くぬき、時には、話に合わせて逆に戻したりするなど、場面展開にこだわり、話を進めている。私は、この演技がとても面白く感じた。ドラマをみているように話の状況がよくわかり、同じ話とは思えないほど面白く、見入ってしまった。

同じ物語でも、演者によって表現方法はさまざまである。演者の表現方法によって、聞き手は物語の説明をただ聞くのではなく、聞き手それぞれが自由に想像を膨らませて物語を感じ取ることができる。このように、演者によって異なる空気や時間を体験できる紙芝居特有の「特別感」が、紙芝居の魅力である、と考えられる。

(植田靖菜)

6. 紙芝居と音楽

6-1 紙芝居に音楽をつけたら

私たちが音楽と聞いて、まず思い浮かべるものはメロディーなどがあって、ひとつの曲として完成されているものではないだろうか。しかし、子どもにとってそれ以外にも、日常生活の中で聞こえる音、自然の中で聞こえる音など全ての音が「音楽」として活かすことができるように思われる。

紙芝居といえば、基本的に読み手が十数枚の絵を、ストーリーに沿って引き抜いていき、読み進めていくものだが、そこに音楽がついているものはあまり多くない。そこで、ここでは、私が紙芝居に音楽をつけるとしたら、というテーマで進めていこうと思う。

紙芝居には次のような音楽の活かし方があるだろう。

(1) 物語を読んでいる後ろで、BGMとして音楽をつける。その場面にあった音楽をピアノなどで、物語の進行を邪魔しない程度につける。

場面によって音楽を変えることで、例えば緊張感が漂う場面や、楽しい場面、悲しい場面、怒っている場面など、より話の内容が分かり易くなる。聞き手もその場面の状況をイメージし易くなるのではないだろうか。

(2) 身近なものを使って音をつける。例えば、風が吹いている場面などでは、新聞紙や紙などを使って音を出すことで風が吹いている様子を表現できる。

身近な素材を用いて音をつける活動では、ただ読み手がやるのではなく、子どもたちと一緒にやってみるのもよいだろう。子どもたちと一緒に、場面に適した音を探し、様々な音に触れながら一味異なる作品を作り上げる。これも面白い取り組みである。

(関 絵里子)

6-2 紙芝居と楽器

紙芝居に音楽が融合すると、ただ読み聞かせをするよりも、より物語の中に入り込むことができる

のではないと思われる。例えば、物語の流れに沿ってBGMをつけることで、物語に表情がプラスされる。また、適切な効果音をつけることにより、より具体的にその物や場景を連想することができるだろう。映画やテレビ番組に音楽が重要な役割を担っているのと同じである。ここでは、紙芝居に用いられる楽器についてみてみよう。

1) 擬音楽器

紙芝居の効果音に使われる楽器をみてみよう。ここで取り上げる楽器は「擬音楽器」という。波、風、鳥や虫などの音を表現するための楽器である。

カラス笛 : カァー、カァーとカラスの鳴き声を出すことが出来る擬音笛



http://astore.amazon.co.jp/tomte_kamishibai-22/detail/B004EXYFPA

赤ちゃん笛 : 手で押さえながら吹くと、オギャァ〜と赤ちゃんの泣き声のような音が出せる。吹き方を変えればコケッココーと鶏のような音も出せる。



http://astore.amazon.co.jp/tomte_kamishibai-22/detail/B004EXTU3C

鈴虫笛 : 二つの笛を一度に吹けば共鳴しあってリーンリーンと鈴虫の音色に聞こえる。小刻みに吹けばコオロギの音色にもなる。



http://astore.amazon.co.jp/tomte_kamishibai-22/detail/B004EXYEZQ

レインスティック ; 雨の効果音が楽しめる楽器



http://astore.amazon.co.jp/tomte_kamishibai-22/detail/B004OLS3TG

2) 音楽紙芝居

近年では、楽器の他にも、歌などを織り交ぜて行う「音楽紙芝居」というものも登場している。話を聞くだけではなく、音楽が混ざり合うことで、子どもたちの感性や想像力をかき立てるのではないだろうか。紙芝居が今後、どのように音楽と融合して進化していくか楽しみである。

【インターネット】

人形劇トムテ『紙芝居の世界』 <http://www.yo.rim.or.jp/~tomte/kami/> (2014/5/20 閲覧)

(武井梨夏)

おわりに

紙芝居の源流は日本である。歴史を刻んだ資料から、紙芝居が人々の生活の中に根付き、多くの人々に親しまれてきたことがわかった。私たちは現代に生きている。そこではテレビ、ラジオ、インターネットなど多くのメディアに囲まれ、便利な環境の中で過ごしている。一方、紙芝居が誕生した当時、(紙芝居は)このメディアに相当する役割を担っていたように思われる。紙芝居で身近に触れる読み手の豊かな表現は、子どもたちの心をつかみ、コミュニケーションを生み、そしてドラマの世界に誘い込んでくれた。紙芝居の中で沸き起こるドキドキ・ワクワク感が、私たちの心をつかんで離さないものである。

紙芝居は子どもを対象とした貴重な文化財であるが、それは子どもにとどまらない。大人にとっても魅力的な存在である。この魅力は、読み手の表情豊かな表現に負うところが大きい。そこで広がる読み手と聞き手の人間的なかわりこそが、この紙芝居の魅力を一層輝かせているように思われる。

(神原雅之)